巻 頭 言

木曽地域の紹介と地域の医療事情について

井　上　　敦

木曽地域は長野県南西部の，木曽川流域と御嶽山山麓地域を指します。岐阜県と長野県の境にあたり，昔の名称でいえば美濃国や飛騨国と信濃国の境にあたります。木曽路はすべて山の中である：の書き出しで知られる，島崎藤村の夜明け前という小説は，米国ペリー来航の1853年前後から1886年までの幕末・明治維新の激動期を，中山道の宿場町であった信州木曾谷の馬籠宿（現在の岐阜県中津川市馬篭）を舞台に，主人公青山半蔵をめぐる人間群像を描き出した大作ですが，作品の中には山々に囲まれた一種独特の陰鬱な雰囲気が立ち込めています。古くは源氏同士の争いに敗れ，源頼朝の兄義平に父を殺された木曽義仲が幼少時に逃げ込んだ地です。義仲はここで勢力を蓄え，平氏を退けついには京都を占領しますが，頼朝の弟の義経に敗れ悲劇の最後を遂げます。戦国時代，義仲の子孫の木曽氏は武田信玄の勢力伸長により甲斐国への属国化を余儀なくされます。これにより木曽は，武田家の美濃国や飛騨国への侵攻における最前線基地化されました。しかし信玄の死後，武田勝頼が長篠の戦いで織田信長に敗北すると，木曽義昌は信長の誘いに応じて盟約を結んで武田勝頼に対し反旗を翻します。この離反で，勝頼は討伐軍を木曽谷に向けて派遣するも，織田信忠の甲州征伐により敗北を重ね武田家滅亡となります。しかし義昌は人質として送られていた母，嫡男　長女が新府城（甲府）にて処刑されるという悲劇に遭遇します。木曽氏はその後深志城を居城にするなど勢力をのばしますが，豊臣秀吉，徳川家康の権力闘争の渦の中で途絶えてしまいます。江戸時代には江戸と京都を結ぶ中山道の中間に位置する交通の要衝として木曽福島に関所がおかれました。現在では東海道と中山道の交通量は比べるべくもありませんが，当時は中山道のほうが旅人には人気がありました。というのも東海道は大井川と天竜川という大きな川があります。そのため増水による川止めがしばしばあり，水が減るまでそこに滞在しなければならかったという事情もあり，川がない山道の中山道のほうが便が良かったわけです。新撰組の人々が中山道を通って上京しましたし，皇女和宮の一行が江戸に下った様子はよく知られていると思います。そうしたことから人の往来も多く宿場町は賑わいました。尾張藩によって厳重に保護された木曽ヒノキの美林はいまなお当時の面影を留めています。しかし明治以降は東海道の発展に比べて，中山道の凋落は著しく，東名高速道路と国道19号線，あるいは東海道新幹線と特急しなのの差となってしまっています。それでも林業が盛んだったころは営林産業でさかえましたが，家も工場で作って，現地で組み立てるだけの時代となり，輸入木材に押されて林業が衰退し木曽は過疎化，高齢化の進む地域となるに従い，観光以外これといった産業もなくなってきてしまっています。

さて現在の木曽地域ですが，３つの町（木曽町，上松町，南木曽町）と３つの村（王滝村，大桑村，木祖村）よりなり，南北約60 km，東西約50 km　総面積は香川県とほぼ同じ面積で県土の11.4％を占めますが，人口は昭和35年以来減少し続け，平成25年３月１日現在29,880人（長野県毎月人口移動調査）で県人口のわずか1.4％を占めるにいたっています。また65歳以上の高齢化率は35％と全国の23％を上回り，老齢化と過疎化が進行しつつあり，地域特有の疾病構造と介護環境を抱えています。木曽地域は長野県が設定する10の２次医療圏の一つになっています。しかし有床診療施設は木曽病院唯一です。ほかに13の診療所がありますが，開業の先生方も高齢化し，新規開業も最近はありません。面積も広く無医地区も多く存在しています。また医師不足，看護師不足も顕著であり，人口10万人当たりの医師数は109.5人，看護師数は863.4人で，医療圏の中では最も少なく，県平均の医師数205人，看護師数1,094人を大きく下回っています。そのような中，木曽病院は，木曽地域唯一の病院として，基本方針において，いつでも，だれでも安心してかかることのできる地域完結型の病院であることを掲げ，救急については2.5次救急医療まで，24時間365日体制で，全診療科がオンコール体制を敷き，急性期から慢性期まで，訪問在宅診療，無

医地区への巡回診療，検診さらに災害時医療や周産期医療と幅広く診療活動を行っています。救急告示医療機関，災害拠点病院，僻地医療拠点病院の指定を受けています。長野県内の他の病院も状況は似ているとは思いますが，医師不足，看護師不足の中，日夜奮闘しているところです。

さて木曽といえば古来日本の高級建築材である檜（ヒノキ）が有名です。木曽病院では木曽上松町にある天然ヒノキ林である赤沢自然休養林でヒノキから発するフィトンチッドを浴びて散策する森林浴を組み合わせた森林セラピーやセラピードックのような取り組みも行っています。一般に木曽檜といった場合，150年以上の天然の檜を指します。木曽檜は日本最大の天然檜林です。最老齢の檜は700年くらいで，胸高直径120センチに及びますが，老齢になると成長はぐんと遅くなります。檜は木曽以外の地域では40年程で太くなるのに対して，木曽檜は同じ太さになるのに約70年もかかります。それは山の傾斜が険しく，多雨で寒さが厳しい自然環境のため，成長に時間がかかるのです。しかしその分，木目が細かくなり，弾力性の高い木になります。また，ゆがみや縮みが少ないため，極めて建材として，適した用材になります。また建材としては耐用年数が非常に長いのも特色です。伐採後，数100年に渡り強度を増していき，1,200〜1,300年という気の遠くなるような時間を経て伐採時の強度に戻るといわれています。世界遺産に指定された法隆寺の五重塔に木曽檜が使われているのは有名な話です。また伊勢神宮では20年に一度，社を新しく建て替える式年遷宮と呼ばれる行事が行われ，大量のヒノキ材が必要となります。古くは伊勢国のヒノキを使用していましたが，現在では木曽の国有林からヒノキを購入して式年遷宮を行っています。伊勢神宮の式年遷宮後，前回の式年遷宮で使用されたヒノキ材は日本全国の神社に配布され，新たな神社の社殿となるそうです。赤沢自然休養林に行き森林セラピーのコースをたどると，人手で斧を用いて伐採し，伊勢神宮の御神木につかわれた木の切り株が祭られているのを見ることができます。このコースはきれいに整備され，景色も素晴らしく，ヒノキの香りに包まれて，散歩すると心が洗われるような爽快感に満たされます。皆さんもぜひ足を運んでいただければ幸いです。

さて当院は災害拠点病院ということで災害に対し常に準備していなければならないのはもちろんですが，先年の東北の地震，大津波のような大災害はいつ起こるかわかりません。日頃の備えと事が起きた時の迅速果敢な行動という点では木曽ヒノキにまつわる有名な話があります。江戸時代初期の政商河村瑞賢のエピソードです。小さな材木商だった瑞賢にとって明暦３年（1657）１月18日，運命の日がやってきます。「明暦の大火」または「振袖火事」と呼ばれる火事が発生したのです。江戸のほとんどを焼きつくし，10万７千人以上の死者を出す大惨事となりましたが，瑞賢はこのとき燃えさかる自宅をうち捨ててありったけの金をふところに入れると木曽福島に向かいました。江戸に大火が起ったニュースはまだ木曽に届いてはいませんでした。瑞賢は木曽の木材を一手に管理していた山村家を訪れます。山村家の庭先で遊んでいた子供を見た瑞賢は所持金の中から小判を３枚取り出して穴をあけると紙のこよりを通し，子供におもちゃとしてあたえます。そして山村家の主人に面会を乞い，あるだけの材木を買いたいと申し出ました。主人は一瞬警戒しましたが，子供にあたえた小判を見てすっかり瑞賢のことを江戸の大商人だと思いこんで信用しました。しかし，瑞賢のふところには最初から10両しかありませんでした。そのうちの３両を子供にあたえたのです。この大バクチに勝ってまんまと買い占めに成功した瑞賢はすぐさますべての材木に「江戸河村十右衛門用材」という刻印を押してしまいました。まもなく江戸の復興のための材木を求めて江戸の材木商たちが木曽に殺到したのですが，しかし，どこをさがしても買える材木はなく，あるのは瑞賢の刻印をした材木ばかりでした。彼らは瑞賢から材木を買うより他に手段はなく，かくして瑞賢は巨利を手にしたのです。そればかりか幕府の普請方に接近し大名や旗本たちの屋敷の新築工事を請負ってさらに富を蓄積しました。まさに機を見て他の商人たちより一瞬早い行動を取った瑞賢の大成功でした。むろん瑞賢は普段から火事と材木価格の変動について十分に研究し尽くしており，事に応じて見事な行動力と胆力で成功したわけです。少しずるいような気もしますが，日頃の営みから変事を予想し，いざという時に的確に行動に移せることができたという点では大いに見習う必要があろうかと思います。木曽病院も日常業務を充実させ，地域の医療を守ることはもちろんのことですがさらに，起こりうるあらゆる変事を予想し的確に対処していきたいと思っています。

（県立木曽病院 院長）